

第15回

「目標を明確に示し、すべてを楽しく前向きに」

東京大学 環境安全本部

大学院 新領域創成科学研究科（兼任）

教授 飯本 武志

本郷キャンパスの龍岡門からすぐの本部棟に飯本先生をお訪ねしました。飯本先生とは、放射線線量評価関連の仕事でご指導賜り、以前から親しくしている社員が何人もおります。気さくで元氣な先生の語り口に引き込まれてしまいました。

一 幼少期はどちらで過ごされたのですか。

私は千葉県松戸市で生まれました。結婚して新居を構えるまで、千葉大学の松戸キャンパス内の官舎に住んでいました。父が千葉大学園芸学部で教鞭をとっていたのです。その頃は畜産関係のメンバーも松戸キャンパスにいましたので、牛や鶏も普段から見慣れていて、山積みの牛糞堆肥やたくさん並んでいる格好良いトラクターが遊び道具、敷地内の球技用グラウンドや大学の農場が私の幼少期の主な遊び場でした。父は農業機械、特にエンジン開発の専門家。職場と家が近いこともあり、昼食と夕食時にはいつも帰宅し、食事が終わればまた研究室に戻るという毎日だったことを覚えています。機会を見ては父に職場の研究室に連れていってもらったり、学生さんが家にときどき食事をしに来たり、そんな当時でした。ですから、私が研究者を目指し、大学で教鞭をとる道を選んだことは、父の影響が大きかったことはまず間違いありません。

一 特に、興味をもっていたことは。

新しい科学技術へのあこがれは強く、学研の『科学』とか『Newton』などの科学雑誌を定期購読して、興味を広げていました。私にとっての身近な研究者だった父は、柑橘類の皮やナタネ油から燃料を精製し、トラクターのエンジンを動かそうとしていました。当時はまだまだ実用化にはほど遠かったソーラーパワー

にも挑戦していたと記憶しています。これが「これからは資源、環境、エネルギーが大事だ」と私が漠然と考えるきっかけになったと思います。

このような流れで、早稲田大学の理工学部資源工学科に進学しました。当時の資源工学科は鉱山学科の流れを汲んだ色がまだ濃く残っており、講義や研究は、鉱石や石油、石炭の探査と採掘に重きがおかれていました。その中で、ウラン鉱山に関する環境問題や、作業者や周辺住民の健康問題につながるラドンの研究をしていた黒澤龍平先生に師事することを決め、研究生生活をスタートしました。卒業論文、修士論文、博士論文では、ラドンやトロン（トロン）の測定や被ばくの評価に関する研究をし、その過程で、国際放射線防護委員会（ICRP）等の役割や活動を知りました。放射線や放射能の計測を研究しつつ、鉱山の安全管理の話題に触れる機会も多かった頃です。高校や大学の通常の講義では、環境管理や安全管理の世界に出会う機会はあまりなかったのですが、ちょうどこの頃に環境安全管理の世界を私をはじめで認知したのだと思います。

一 研究者としての経歴を教えてください。

早稲田大学大学院（理工学研究科 物理・応物専攻）で博士（工学）の学位を取得した後、東京大学の小佐古敏荘先生にお声がけいただき、1996年に東京大学原子力研究総合センターで非常勤講師（研究機関研究員）としてのキャリアをスタートさせました。兼務で、放射線医学総合研究所人間環境部の藤元憲三室長チームにも属し、ラドン研究を継続しつつ、少しずつ放射線防護や放射線安全管理の実務や研究にも触れました。その後短い期間でしたが電力中央研究所にも研究員として従事した後、東京大学に戻り助手、助教を

経て、2007年に東京大学環境安全本部の准教授、2015年に柏キャンパスの大学院新領域創成科学研究科(環境システム学専攻)の中に放射線リスクを扱う研究室(環境安全マネジメント学)を立ち上げて、現在に至っています。

大学入学前から「資源」「環境」「エネルギー」に興味をもっていたところに、研究活動を通じてウラン資源から原子力エネルギーに関連した研究へと幅を広げたことで、放射線リスクの問題を環境と人間の関係の中で大局的に扱うことのできる「環境システム学専攻」で、自分の研究室をもつことができました。一見、遠回りに思えるすべてのことが繋がって、ついに当初の望みがかなったという思いでした。

一研究活動のモットーを教えてください。

所属する院生や留学生らと相談し、我が研究室のスローガンを「Study Harder and Play Harder」に決めました。懇親会の乾杯の発声にはいつもこのフレーズを使います。学生には「この順番こそが大事だ」と強く言っています(笑)。

一組織をまとめていくには、どのようにすればよいのですか。

リーダーとして組織を牽引するには、明確で具体的な目標を示すことが重要です。メンバーからの共感が得られれば、目標に向かう方向性は自然と保たれるでしょう。そして何よりも大事なのは、その活動についてリーダー自らが楽しく前向きに取り組む姿勢を隠さず見せ続けること、だと考えています。私は大学3年時に全日本学生軟式庭球同好会連盟の理事長を務めた経験があります。このときに、大きな組織をまとめる難しさを体験し、目的や考えの異なるメンバーと共に大きなミッションをクリアするために必要となる、何らかの要素を学んだ気がします。

一人材育成についてのお考えは。

現時点で私のやりたいことの第一こそ、人材育成です。実は私の研究室には、放射線を扱える適切な施設がありません。まさに今、JAEAさんや量研機構放医研さんなどに所属する客員研究員のメンバーから大きな協力をいただいて、学生たちが伸び伸びと研究で

きる仕組みと環境を整備しつつあります。そもそも私ひとりの知見と力量では、視野を広くもつ若手を指導することは不可能ですから、私のもつネットワークをフル活用して、業界全体として人材育成に取り組んでいきたいと思っています。

いま IAEA アジア太平洋局による学校教員人材育成技術協力プログラムに、日本代表として参画させていただいています。そこでは「WOW Factorが重要!」と強調し、各国参加者から共感を得ています。思わず「ワオ!」と言ってしまうような、驚きや感動、発見のある要素の導入が人材育成には絶対に必要ですね。ターゲットに魅力を感じれば、参加した教員自らが一生懸命に活動に取り組むようになります。このプログラムを通じてすでに多くのスター教員が育っていることは、関係者のひとりとして大変に嬉しいことです。



IAEA アジア・太平洋局 技術協力プログラム
モンゴル・ウランバートル (2018年10月8日) より

一学生に対して、気をつけていることは。

特に留学生の出身国ごとの文化・風習の違いに驚くことがあります。ごみの捨て方、自転車の乗り方など、日本では当然のことが、きちんと言葉で伝えないとダメですね。放射線利用時の安全ルールの違いには特に気をつけないとはいけません。自国ではこう教わった、日本のルールは知らなかったでは済まされないので、自国で放射線利用の経験のある留学生にも、全く初心者日本人学生と同様な講習を受けさせています。国ごとのルールの特徴や違いについて比較をさせることも勉強の範疇ですし、良い経験にもなっているでしょう。

ー学会活動について教えてください。

現在は日本保健物理学会の常務理事、日本原子力学会保健物理・環境科学部会の副部会長を務めています。学会も様々な考えをもつ個々の会員の集合体です。会員の満足を保ち、その分野の成果を大きくし、社会から期待される役割を十分に果たせるようにすることは簡単ではありません。自らが研究者として学会活動に参画するのみならず、育ててくれた業界への恩返し of 気持ちで組織運営側の仕事に取り組んでいます。

ーこれからの研究課題について。

化学物質をはじめとする様々なリスクと並んで放射線リスクがある、というスタンスを明確にしています。研究室をもつ大学院では、環境系の専攻のなかで「放射線」をキーワードとして、自然科学研究と社会科学の両軸から「リスクマネジメント」を追求することになります。放射線の計測法や線量評価の開発、安全管理や規制科学に関すること、自然放射線（能）に関すること、環境放射線防護や環境アセスメント、リスクマネジメントやリスクコミュニケーション、等に関連すれば、どのような研究テーマを選択しても良いと、学生には言っています。学生の個性が活きるような、特徴ある研究テーマが見つかるといいですね。



研究室懇親会（2018年10月5日）より

（編集後記）

先生の全日本学生軟式庭球同好会連盟の理事長歴任で培ったコミュニケーション能力は抜群です。放射線について、市民と向き合ってわかりやすく話ができ、市民の話を聞く十分な包容力をもつ飯本先生。これからの益々のご活躍を信じております。

2018年10月